



小野市立好古館「地域展」について（時評・書評・展示評）

坂江, 渉

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 2:147-150

(Issue Date)

2010-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002389>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002389>



小野市立好古館「地域展」について

坂江 涉

はじめに

二〇〇二(平成十四)年から毎年、小野市立好古館において、「地域展」が開催されている。これは原則として小野市内の小学校を単位にしつつ(おおよそ旧行政村と重なる)、各地区(おおよそ旧村と重なる)の歴史文化に光をあてた特別展である。展示会では、それぞれの地域を代表する文化財や絵図・古文書などが展示されるほか、地元の子供たちが共同で調べ上げた学習成果が掲示されるコーナーも設けられる(二部構成)。神戸大学は小野市との間で、二〇〇五年一月、社会文化分野での連携に関する包括協定を結んだ。それ以降、総合大学

の強みを發揮して、多様な角度からこの地域展作りに協力するとともに、本展を博物館の学芸員をめざす学生たちの実践的なインターシップの場としてきた。評者も二〇〇六年以来、毎年この事業に協力し、展示会ができあがっていくプロセスをながめてきた。小稿では、地域展開催の意義と成果について述べてみたい。

一 子供たちの調べ学習の成果

まずこれまで八回開かれてきた展示会のテーマを示すと、以下の通りである(括弧内は展示会期)。

- ・二〇〇二年「わたしたちのまち・阿形——村方文書から見た村」(二月十五日～三月二日)
- ・二〇〇三年「わたしたちのまち・中番」(二月十四日～三月七日)
- ・二〇〇四年「わたしたちのまち・黍田」(六月十九日～七月十九日)
- ・二〇〇五年「青野原俘虜収容所の世界——河合地区の近世・近代から現代——」(十月一日～十二月二十七日)
- ・二〇〇六年「太閤検地と河合郷——河合地区の近世・近代

から現代」(十月十四日～十一月二十六日)

・二〇〇七年 「河合地区の古代・中世遺跡と赤松氏」(十月二日～十一月二十五日)

・二〇〇八年 「来住地区の近世・近代から現在」(十一月一日～十二月十四日)

・二〇〇九年 「大地に刻まれた歴史——来住地区の古代・中世——」(十月三十日～十二月十三日)

最初の三ヶ年の展示テーマに「わたしたちのまち」という言葉が冠せられているように、本展はあくまで小野市内の地域の人々が愛着をもつ地域文化の特徴を改めて捉え直し、それを若い世代に継承してもらおうことをめざしている。そのため子供たちが調べる学習テーマは、「地名」「屋号」「小字名」「道と道標」「田んぼと水利」「年中行事」など、それぞれの地区の生活に根ざした、ごく普通の項目が選び出されていく。これらの項目について、七、八名程度のグループに分かれた子供たちが(小学生と中学生)、地区内の大人や老人たちから聞き取りをおこない、あるいはフィールド・ワークを実施する(教師の支援がある)。そうすることにより、それまで伝え守られてきた伝承や記憶が世代間で伝達されるよう仕組みられるとともに、異世代同士が交流する機会も創出されるわけで



子供たちの調べ学習展示コーナー眺める見学者
(2009年)

ある。

もちろん子供たちと高齢者との結びつきが、これを通じて急激に深まる効果上がるわけではない。しかしかつては挨拶もしなかつた同士が、地区内ですれ違う際、挨拶をするようになるなど、徐々にはあるがコ

ミュニティーの活性化のきざしも生まれつつあるという。そしてこのような過程を経てできあがった学習成果は、各グループ毎に模造紙にまとめられ(夏休み中)、展示会で公開され、さらにカラー刷りの立派な展示図録にも収められる。

ちなみに昨年度の地域展「大地に刻まれた歴史——来住地区の古代・中世——」で展示された子供たちの作品テーマは、「昔の人が造ったため池のまかせ溝と塔の池水路」「下住町の地名と小字」「田んぼの水はどこから来るのか」「I区のむかしの道と今の道」「下住町2組の小字名」「昔の通学路と

古い道」「加古川で行われた漁」「いつまでも伝えたい昔の屋形のように」「下來住町4区の小字」「今と昔の学校道」「樂しみいっぱい通学路」「原の昔と今の道」「道・今昔」「勘・家老戸谷から小学校への道」「岩倉・福甸の通学路の移り変わり」「むかしの水利」「今と昔の学校道」「阿形町の水のながれ」「西脇町の地名」「今と昔の通学路」「西脇町の水路について」などであった。

これからわかるように、いずれのテーマも地域にとって何気ない身近なものばかりである。おそらく他の地域の人々にはほとんど関心のわかないテーマかも知れないが、来住地区の人々にとっては愛着のある内容である。とくに戦前の古い地図なども用いた「道」の復元図の展示などは、多くの地元住民が関心を寄せるコーナーであり、展示会の見学者がしばしば立ち止まって話し合う場面もみることができた。

このような展示の仕方により、小野市立好古館の年間入場者数は、地域展の開始以降、大幅に増加し、二〇〇一年頃まで平均して約五、六〇〇〇人だった入場者数は、二〇〇三年以降の平均は、それまでの約二倍以上の一万二〇〇〇人になっているという（人口比約二〇%以上）。地域展の開催は地域を活性化させるばかりか、博物館自身の運営にも大きな効

果をもたらしている。

なお右に示した昨年度の調べ学習テーマから窺えるように（「樂しみいっぱい通学路」など）、子供たちの展示のやり方は、年々、人を惹きつける工夫度合いが増してきた感がある。模造紙上の叙述やレイアウトも、当初と比べてかなり上達してきたという声が聞かれた。これも子供たちを主役とする地域展を支援する、父兄や地元の方々の熱意のあらわれといえるであろう。

二 学術的な共同研究の成果と展示

一方、専門的な展示コーナーについては、学芸員によって選ばれた地域内の関連する考古遺物や指定文化財が展示されるほか、可能な限り、地域の文献史料や歴史遺産を素材とする、大学との共同研究の成果が活かされるように工夫されている。

例えば、二〇〇五年の「青野原俘虜収容所の世界——河合地区の近世・近代から現代——」展では、第一次世界大戦中のドイツ・オーストリア兵捕虜と河合地区の住民との交流を示すいくつかの遺物が共同調査によって発見され、その展示



青野原俘虜収容所の世界展で展示された「俘虜のビリヤード台」(2005年)

された楽譜にもとづき捕虜兵の演奏会を再現するコンサートも開かれた。地域展をめぐる地道な研究成果は、世界とも結ぶ国際的な事業にも発展する形になった。

またこのほか展示会の図録には、展示品の解説などとともに、地域連携センタースタッフの専門性を活かした論考が載せられることが多いが、そこではなるべく住民の関心に即した身近なテーマが選ばれ、その研究成果がわかり易く示される。二〇〇七年開催の「河合地区の古代・中世遺跡と赤松氏」の図録では、河合西地区に残る絵図や検地帳などを素材にして、同地区の江戸時代から明治にかけての「小字」名の変遷

品の多くが見学者の大きな関心を呼んだ。またその後、本展を捕虜たちの祖国のオーストリアで開く計画が持ち上がり、ついに二〇〇八年九月〜十月には、「里帰り」と銘打った展示会がオーストリア・ウィーンの国家文書館で開催された(発見

が取り上げられ、地域の人々の興味をひいた(木村修二「河合西地区の『小字』の変遷」『小野市立好古館 秋季特別展図録』小野市立好古館、二〇〇七年)。

おわりに

以上のように、小野市立好古館の地域展は、子供たちの手作り感のあふれた地域性と、専門性とを融合した特色ある展示企画となつている。評者は、本展が地域遺産を活用したまちづくりのかなり有効な方策の一つと考える。今後、これを参照にした展示会づくりが各地で広がり、地域社会と博物館の活性化が進めば幸いである。